

## 佳作

### 日本を育てた只見川

福島県立会津学鳳中学校

3年 甲斐 泰平

「ダム」の階段」。

そう呼ぶのにふさわしい川が、私の住む会津地方にある。それが只見川だ。只見川は、尾瀬沼、尾瀬ヶ原を源流に新潟県と福島県の境を北に流れ、その後会津盆地の中心を流れる阿賀川に合流する一級河川だ。

只見川には10カ所の水力発電用ダムがあり、上流から、奥只見、大鳥、田子倉、只見、滝、本名、上田、宮下、柳津、片門と階段が下るようにダムが続いている。

しかし、これだけのダムを満水にする水はどこから来ているのか。その秘密が、尾瀬沼が水源地となる奥会津と新潟の県境付近に降る大雪だ。この辺りに降る雪は、人類が住む地域に降る雪としては世界トップクラスである。この降り積もった大量の雪が解け出し、只見川に流れ込み、ダムを満たしてくれるのだ。雪の良いところはそれだけではない。いくらダムがたくさんあっても、一気に大量の水が流れこめば持ちこたえることはできず、ダムの越水が起き、地域に大きな水害が起きてしまう。

でも雪は一気に解けない。夏に近づくとつれ、少しずつ解ける量が増し、ちょうどよい量の水を只見川に供給してくれるのだ。だから只見川にあるダムは無駄に放水する必要がなく、水を計画的に使うことができるのだ。だから、この只見川流域に降り積もる雪は「白いダム」と呼ばれるそうだ。

私は小学生の時、この只見川沿いを走るJR只見線に乗り、「只見ツアー」に参加した。そこで只見川上流部のビッグダム田子倉ダムを訪れるのだが、そこで私の質問に答えた父の横顔が今でも忘れられない。私はダムを見ながら父にこう質問した。

「ここでつくられた電気が、僕たちの家で使われるんだね。」

それに対し、父はこう言った。

「ここでつくられた電気は昔から東京に送られてきたんだよ。福島のための電気じゃない。」

私はとてもびっくりした。どうして会津の只見川でつくられた電気が会津ではなく、東京に行くのかと。

疑問に思った私は只見川の発電の歴史を調べてみた、只見川の発電の歴史はかなり古く大正時代から電源開発が始まっている。昭和30年代には国の「只見

川特定地域総合開発計画」により大規模な水力開発が進められ、特に田子倉ダムは巨大な発電量を有し、その電力が太平洋戦争で焼け野原となった東京を復興するのに大きな役割を果たしたのだそうだ。さらに只見川でつくられる電力が全く地方に使われてないわけではなく、東北電力株式会社のダムである本名、上田、宮下、柳津、片門の各ダムは、その名のとおり福島をはじめとする東北地方に電気を送っていることがわかった。

現代では火力や原子力といった発電が主力となっているものの、戦後間もないころ、日本の復興はこの1本の水流が支えていたと思うと、只見川がとても荘厳なものに思えてきた。

でも、この陰には多くの人々の協力があつたことも知った。例えば田子倉ダム。かつて、ここには田子倉集落があり、山菜、キノコ、魚に恵まれ、人々は豊かな生活を送っていたそうだ。しかし昭和34年、田子倉ダムの建設によりこの集落はダム湖の底に沈み、そこに住んでいた290人の人々は故郷を去り、別の場所に生活に移すことになったことを知った。当時は反対運動も起き、住民たちの苦渋の決断が戦後日本を支えるダムを造ったのであつた。

私は毎年のように東京へ旅行に行く。東京スカイツリー、東京タワー、新宿のビル街。そして父が運転する車が首都高速を通るとき、どこまでも続いているように思える街並み。この豊かな生活を、人の少ない山の中を流れる只見川がつくつたのだと思うと、何だか不思議な気持ちになつた。しかし私は思った。確かに福島でつくられた電気が東京で使われたとしても、それは巡り巡って福島に帰って来るのではないかと。日本の中核は東京だ。法律も、行政も、東京が中核でここが国の基本になっている。また、東京は商業の中心でもあり、全ての物資は1回ここに集められ、あらゆる形になって地方へ流れていく。もちろん、その物資、たとえば野菜であつたり、魚であつたり、あらゆる物は地方から集まるものだ。それが東京に集まり、また地方へ帰っていく。こうやって世の中は回っていく。だからこそ、電気をどこでつくるかという問題ではなく、つくつた電気を日本のためにどのように使っていくのかが大切なのだと思う。

只見川は何も語らない。今日も静かに、緑色にきれいに輝きながら流れ続け、この国に力を与えている。